

2025年11月2日 礼拝説教要旨

ヨハネによる福音書講解説教58「奪い取られない命」

詩編16：7～11、ヨハネ10：22～30

聖書はイエスさまとわたしたちの関係を羊飼いと羊の関係になぞらえます。それは「良い羊飼いは羊のために命を捨てる」（10：11）とあるように、命がけで羊を守る羊飼いです。その羊飼いの姿こそ、わたしたちのために十字架で死んでくださったイエスさまを最もよくあらわしていると言えます。神さまが、わたしたちのためにそのように命を張ってくださっていることを考えたことがあるでしょうか。命を張るなど、そんなの神さまらしくない。世の中では、神さまは痛くも痒くもなく、高いところから涼しい顔をして、わたしたちを眺めておられるというイメージがあるかもしれません。しかし少なくとも、聖書が示す神さまはそうではない。むしろわたしたち羊のために命を捨てることもいとわない、なり振り構わず、必死で羊を守る。それが聖書の示す神さまの真実なお姿です。

今日の週報の礼拝プログラムのところに「降誕前第8主日」とあります。「降誕」というのはクリスマスのことです。早いもので教会ではクリスマスを数えて待つ季節になりました。クリスマスは、それこそ神さまがなり振り構わず、わたしたちと同じまことの人となられ、わたしたちのところにまで降りて来てくださった出来事です。それは羊飼いと羊のことで言えば、どこまでも迷い出た羊を追いかけて、とうとうこの世にまで来られたと理解してもよいのです。そしてまことの人となられたイエスさまは、やがて十字架へと向かわれます。使徒信条では「主は聖霊によりてやどり、おとめマリアより生まれ」とクリスマスの出来事を言い表し、それからすぐに続けて「ポンテオ・ピラトのもとに苦しみを受け、十字架につけられ、死にて葬られ」とイエスさまの十字架の死を言い表します。それは誰もが恐れてやまない死の中へ、さらには「陰府にくだり」、もはや光の届かない完全な闇、神さまと完全に断絶されたところへイエスさまが降られたということです。何のためでしょう。それは羊であるわたしたちを捜して救い出すためです。そのようにして迷い出たわたしたちをどこまでも捜し出し、「わたしの羊」（27節）、ご自身のものとしてくださるのです。

先週は九州連合長老会の講壇交換がありました。今回は『ハイデルベルク信仰問答』の問1を手掛かりにして牧師たちがそれぞれ自由に御言葉を語りました。問1「生きるにも死ぬにも、あなたのただ一つの慰めは何ですか。わたしがわたし自身のもではなく、体も魂も、生きるにも死ぬにも、わたしの真実な救い主イエス・キリストのものであることです」わたしが他の誰のものでもない。イエスさまのもの、イエスさまの所有になることにただ一つの慰めがある。この信仰問答は言い表します。この講壇交換のために勉強会をしたのですが、ある牧師が「イエス・キリストのもの」という部分に注目して、この「所有」という考え方の根底には「契約」と指摘していました。例えば出エジプト記に「わたしはあなたたちをわたしの民とし、わたしはあなたたちの神となる」（出エジプト6：7）とあります。神さまはわたしたちを「わたしの民」とされる。それが聖書の示す契約です。ところが人間はこの契約を自ら反故にしてしまいました。出エジプト記で言えば、金の子牛を作って拝むという大罪を犯すのです。

アダムとエバ以来、人類はそうように神さまに絶えず背き続けてきました。契約をなかつたものにしてしまう。そのようにして人間はもはや神さまのものではなくなるのです。普通ならそれで終わりでしょう。人間同士の関係ならそれで終わりです。けれども神さまはそれで終わり

になさらない。それでもなお契約を継続されようとなさいます。イザヤ書に「ヤコブよ、あなたを創造された主は、イスラエルよ、あなたを造られた主は今、こう言われる。恐れるな、わたしはあなたを贖う。あなたはわたしのもの。わたしはあなたの名を呼ぶ」(43:1)とあります。ここには神の民がどんなに神さまに背いても、「わたしはあなたを贖う。あなたはわたしのもの」と、その罪を贖い、どこまでもわたしのものとされる神さまの恵みが表されています。

そしてその恵みはやがてイエスさまによってはっきりと現れました。「わたしたちが神を愛したのではなく、神がわたしたちを愛して、わたしたちの罪を償ういけにえとして御子をお遣わしになりました」(Iヨハネ4:10) イエスさまは、十字架で死んで、罪の支配からわたしたちを完全に買い戻してくださいました。そのようにして十字架の死まで、陰府にまで、命がけで失われたわたしたちを捜し出される。そして神さまのものとしてくださるのです。それが新しい契約です。

今日のところで「神殿奉献記念祭」という言葉が出てきました。「そのころ、エルサレムで神殿奉献記念祭が行われた」(22節) なぜヨハネ福音書を書いた教会は、このような言葉をわざわざここに入れたのでしょうか。神殿奉献記念祭は、イスラエルの歴史においては比較的新しい出来事ですが、紀元前169年にシリアのアンティオコス・エピファネスという暴君が侵略してきてエルサレムを占領するという出来事がありました。当然、エルサレムの神殿も占拠され、そこにギリシャの神々が祭られ神殿が汚されました。これはイスラエルにとっては屈辱的なことです。それでやがて紀元前164年にユダ・マカバイという人がエルサレムを奪還し、神殿からギリシャの神々を取り除き、まことの神さまを礼拝したのです。そのことを祝い、イスラエルの人々は「ハヌカ」(きよめる)と呼んで今日も神殿奉献記念祭を行います。

カルヴァンはこの「神殿奉献記念祭」という言葉には、もともと「更新」という意味があると指摘しております。汚された神殿をもう一度新しくする。そのようにして神さまとの関係をもう一度取り戻す。それはまさに契約の更新なのです。何よりイエスさまがその契約を更新されるために、わたしたちのところに来てくださり、その命を献げて、わたしたちを罪の支配から奪還してくださいました。そのようにして失われた羊を取り戻す。そして一度取り戻したら、もう誰も「わたしの手から奪うことはできない」と約束してくださる。「わたしは彼らに永遠の命を与える。彼らは決して滅びず、だれも彼らをわたしの手から奪うことはできない」(28節)

この部分は、葬儀の招きの御言葉としてよく読まれます。死という現実に向き合って、わたしたちはその存在が奪い去られることを恐れます。しかしイエスさまは十字架で死なれ、その死の中へ入り込まれ、わたしたちをご自身のもとへ取り戻してくださいました。だからこそ安心してわたしたちは死を迎えることができるのです。イエスさまがわたしたちを「わたしの羊」としてくださることは何と幸いなことでしょう。

天の父よ。あなたは尊い独り子をお遣わしくださり、その命をもって、わたしたちを罪の支配から取り戻してくださいました。「だれもわたしの手から奪うことはできない」と約束してくださいます。そのような確かな契約の中にもう一度生かされていることを覚えさせてください。主の御名によって祈ります。アーメン。